

巻頭のことば

『教育学研究室紀要』の第8号には、2007年度後半から2009年度の院ゼミを中心とした教育学研究室の研究活動報告と卒業生も含めたゼミ参加者の論文、研究ノート、研究動向、学内共同研究（「ジェンダー視点から見た教科書・教材の現状とその課題」）に参加の教員の論文や海外調査報告などが掲載されている。本号作成の牽引者はここ7年近く教育学研究室のあらゆる事務をこなしてくれている村田純子によるところが大である。ゼミ活動等の記録は修士2年の小竹和美による。

教育学研究室は、2007年度後半以降も、文部省科学研究費研究（2006～2008年度「10代の性感染症急増下の日本における性教育の実態と課題に関する研究」）に院生も含めて取り組み、同年9月にはドイツ・イギリス調査に出かけ、11月には質問紙調査の結果を本学で開催された第39回APACPH国際学会で発表した。2008年には博士課程の森岡真梨も一緒に、オーストラリア調査にも出かけている。2009年4月から、橋本が代表を務める新たな科研費プロジェクト（2009～2011年度「子どものジェンダー平等意識形成と学校に関する総合的研究～戦後男女共学制の総括～」）が始まり、それ以前の研究プロジェクトの学会誌への投稿作業等と並行して、新しいプロジェクトへの取り組みが進行している。この間、小野寺、坂口が修士課程を修了し、渡部、茂木が博士課程を修了した。それぞれが論文の作成過程で、新しい研究課題を見いだしており、今後の研究の進展が期待される。新しい科研費プロジェクトを全面的に支えているのは、2009年3月に博士課程を終え、5月から、女子栄養大学特別研究員となった茂木輝順である。また、修士1年に榎村裕子が、博士1年に丸井淑美が加わり、教育学研究室の雰囲気を変えかかっている。

本号掲載論考は、これらの院生の研究活動や科学研究費による研究、学内共同研究でのつながりなどを反映して、さまざまな領域の問題が取り上げられている。その内容の多くは、ジェンダー・セクシュアリティの視点からのものであり、研究のいっそうの広がりや深化が伺われる。今後もこの特徴を継続し、研究室紀要に反映したいものと思う。

橋本紀子